三物解

雪門傳書

祖翁曰発句ハ陽なり脇ハ陰也第三ハ一轉して天地より人を
生ずるが如しと詮は一巻の成就ハ脇第三の働よりして千句万句
にのぼる事に雑話を生ずる時ハ席上のつり様をそこねて
流家ハ長さまた長短連綿きれハ総而序破急の調子をうしなふ
発句ハさらに云に不及也 前後比留遠路近路の五体ありといへども
挙句ハ格前後をえらざるなり 第三ハ格高くしさらハ本体に
当りの表紙ハ見たる発句にて条件き出る棹花の妻とふみと口傳自
然の前後なる事やさてこそ志ありて奇異をもとめたる綺語をかざらんぞ発句
而脇一句を以てかれらを路に引きも路引ハ皆その事なれ第三ハ移形太
山の二三旅みせて彼天地の中ニうち通し人の志らも天と名つけ地と名つけて

より有明の豆腐屋さんの話のすきな物会武い富士もの貸ふ雪う
ち茨田武ハ豆腐の菓雑ふ水ふ富加ま幕ろう石塩と丈おと
の風流ふ物ゆて人となく伝ん乗ま書の乗る心の乗のいとなん
のしことし三物句弱をえう物ふ物ふ乗ふ物うこのいそぬ芝ろ冷ふ物ま
柳の枝ふ出ひとあるる一百余年となりぬ世とを社中の誓りて
序きよと師雪中亀蕉たのとふ物ふ

明和五戊子孟冬

寒夢堂　　渡心

芝乃中　何る外ふきものいそたて　渡心
笠縫　くるを　猫ふ　乗格　天序
ゆくまた落ふ　ふたふ　ふ　て　蕉　を
服甚人ふ　ふ　何る外ふ物いそたといる姿をあるさん
笠縫くるを山間の手業ある心地こを伝水乗格と伝ら天ふ強
沖三　世話の一物句法ハ形形　けるの変伝を新ふ落ふ七くんふ雨ふ
落ふるとふ物ふ笠縫の里の風流ふ物ふ

立ふ水ハ流ふて　物ふ　柳門
変ふ物ふる　背戸の月　蕉　渡心
月の清神を入江ふ渡ふきて　蕉　大

很斗漉　鄙陋なるくらしをしてさすがに秋くる蟲陰ふ梅見る唄もそ
里も古郷のくてうからあ枝こふ蟲をなくふ蟲をなるもえなるあ秋の梶
とを土地を見定ふ事ふ事をなるほ草物のうつるさふや

沖三　所ハ風景の一句句法ハ古山也　赤ふ日出と有て行らひの
むらう泉ハ漕とふ宮ふ月も生るうと万頃の江を見渡ふ山るのこ
蟲入や月をとをさは蛙　象　班　我
毋を行ふ　考　梅子　田乗　眠
をふ日の夫白ををうをを筆て　夢を
很　所ハ其人を伯の丹波　かるをを聞きハと乱ハ日比ハ筆ハをうなる
宮仕へのをしをふ母の昏をなと思ふる名の宮ふ梅も厚主の働也

沖三　所ハ天相の一句句法ハ形　かくる海ををうも面の月の一を
ならんと若ふを風情を云也
風ををの衣桁ふ紙衣ふ　雛　半
小夫をを面く　峯の　十月　新　鈴
蟲をの音聖ハハ八百屋の初後面いて　夢　を
很ハ毋節をして其伯の果也　衣桁ふ紙をハいをを面山夫の音ふハ
をの風をの縁ふ起をまるハさをる山の坊のを面ををうん
沖三所ハ其人の一句句法ハ古山　峰と云より月、板を社なの寺板
筆と見をを一句

　　板ををつ事ゆを中の廣の夢　祇　考

冨士法華寺　樹下　魚　波

紅葉の羽織を井ふ池の日の葉子　夢　を

紹　路は主婦其人の好除　拙一口の面白と東小春うは本立為りて

ちよちよと出る下雪の沖ゆくちんよ　一水行人の面つるひ行る

風情もつることなり

弟三　路は海外の一勢をて句法は形形　連俳とつる前句の移り

ようの書をうつ紅葉は日暮のうつ詩とつ為し

明月や清こみて沖つる大井川　乱　筆

焚火あるる　葉の　秋を　桃　鐘

ちるる葉の作業ふ見れとて遠して　夢　太

紹　路は蕉門　清こふ雪の夕と月の影のもるもまつる

川風のそ波きをふふまれる

弟三　路は其人の一勢句法は古山　蓮舟のんとうはをうの名

を力想能をこ雪あるも

作句て梅を句ふ雪ふ　梅　人

都を一秋人金仏の秋尽　古　春

古襖　古津　蕉の風　月庇ふて　夢　古

紹　主人の好句　句風の雑きくは都方の踏まちちんと

風情をもきる路方

弟三　路は主婦て句法は松形　古津子は高をき水仙る人客

是は竹斎を云ふて前句の枝折となる

相知らぬ人に耳ハちぎれて落葉乱　路

引手も出る雲の下茎　枝菜

其の為の路ハ荒らぬ取らぬけて　蕉　右

評　主人の手際　山風に耳もちぎるゝ程なるなんとハ引手も

出るとしたり　茎と云ふ詞をつゞる山畑の風情のつゞまやし

第二　路ハ附合の一転法ハ枝形也　かゝる名枝の折のハ親仁変りも

仁縁を容て抱合しの俳諧曲実の前の一つやすき

苅稲る棟乃日ハ傾し鶏か啼る　白翅

ぬるて枝乃月の夕栄　西華

咲まさひ秋風出の盛竹ふ　蕉　右

評　路ハ附合の手際　晩稲のむら刈ふ鶏の声の鳴くしき

様なら八構格も深かりて落月の末ハ表返照の面白さや成

第三　路ハ律義く芭蕉の俳句法ハ枝形也　秋風出乃季も

知にして深き事ともいはん

紗幌ハけしらぬなり西瓜賣　梅動

橋もあるくふ月乃詩人　是物

一葉のゝら娘さらひ原ふ寄る乃て　蕉　右

評　其場の手際　西瓜の辻賣も猶る黒塔の比なれハ橋上ふ

汗を拭ひて出るゝふ人の数もたれあるふこそ

第三　所ハ世古路の一軒と句法岩山　むらさやぶの羽風ふく時雨
らんとい[illegible]る家をふき物もひとしてこ[illegible]と臥てみるこ萩は宮高
物の道をてりつる秋風蓬戸
茅茸の庵ゝゝみえを月をたゝ蓼を
侘　其物のそのあこ　こ[illegible]と臥てみるとあ[illegible]
こゝをへきものと蓼してあるをひゝる時雨こ臥物の起句のりこゝる
荒風の風情雲を
第三　其人の一軒句法ハ左山　こゝる山野を家としゝるふ寄位
風雲の伴をもゝる庵

風吹こゝ河水ふ[illegible]ゝ山峰　素宗
晒ゝ[illegible]ゝ石川ゝ　柳酔
茅茸ゝ京岩屋内の羽織ゝて　蓼を
侘　其物ゝ所　風も句ゝ安ゝの姿ゝ水は本津立条ゝの京
ゝゝの雲ゝ峰ゝ[illegible]ゝ　俱きゝ[illegible]ん金[illegible]
第三　所ハ其人の一軒句法ハ板形　晒ゝ石川のゝ[illegible]
江ゝ[illegible]の京ゝ物の雲ゝん

初秋ゝ[illegible]水こゝ本ゝ海のゝる　西　羊
雲ゝ[illegible]ゝ　柳こゝ山　破　顔
雲ゝ[illegible]ゝ　蓼を

紹　其場の名なり也　あるこゝを本まと蒼波遥みなこの名
やらハ風情ゆゑ〳〵なく初て涼しと島を突しも又よし
弁三　其人の一句に句法ハ格形　かゝる山路の下りにハ必宿傷ふ
ひきて入部殿まハきあるをもとゝ

中うらゝ空も秋なり夏は月　樣　風
みちりくるり　山　紫
地り　海岸なりたゝ角さしの角て　夢　を

紹　世界の碧色　夏の秋の空もなほて方ハ深ものう旅ものなるあ人ゝもこゝ紅葉〳〵潮のつるあるさまに
弁三　所ハ其場に句法ハ古山　隅田塵埃ひるの岸てひり

芦原の海の浦より歩く岸のこ地も夏のうつろひふ跡もに

錦木を逢恋ハふくへて故きうの　八十男
若と七度ひるり　蒜　演　可　穂
紹　其人の手法　錦木ハこもつのくの古ものに八男と七度ふ我こ
度ふ逢ん恋ふ其の若命をもて風情を合きう
弁三　所ハ其場の一句みて句法ハ格形　三度七度のふむ〳〵ろハ風
小屋の物ひ合をもるう

百姓ふ松を踏りて松和の歌　史　仙
小夫り句ふ松のうけ　稲　留　嵐

法ハ、うるさき蔭の日ざしに腰はなして夢を
紹 時節の去来し 秋ハ海ゆくことくふるわり小夫とは世を会をさう
金陽明の名月素堂もかるし
弟三 降ハ其人の一句句法ハ古山 夜寒に近り七夜所ねこ紙り
降る富士の人をハ傳儀歓迎雅子候川とひ〜ふをも似さらん
風ふき出ぬ女の罪や土角 千 五 明
豆腐 水と搦を裏北 日 可 貞
いさのひふ折こハ碁の中絶て 夢を
紹 其人の去除 二階坊主の風ふも寒ふて豆腐をすき所なく
こゝろのことゝもとゝ知あり〜家あるの秋

弟三 腰をし句法を枚形 折この碁をうひを老の寒を
なるん

稲妻り戸の立ハいぬ碑をこゝ 雨 孝
旅のこゝ後雲を屋敷月 素 勇
去力抜も金人茶寒法をて 夢 左
紹 其人の去除 秋の富腰〜といふ原仮庵とゝるるを
弟三 降ハ其人の一句句法ハ古山也 前を号枕のくゝんふ出弱ひし
人と尺年一言

豆腐屋の汗うと夜を
法もとゝるる碑の六月 芳 笑

遣唐使のうたの意味もとり　夢　を

詔　其所の名を　彼矢さしの浦をとこそ白波多つさ

なるむ

沖三　其人の一類すて白法ハ左山也　鄭奥考義を云る西方

めしもあるハ

叶吉似ハ鬱鬱まるし紅こそ　巴　水

永東をやむ　陸このあ月　白　亀　六

みるるふ原ハまさと問てんて　夢　を

詔　世世古原　叶色のロまめたる唐ふ丘をさるるまきる

へしと信松原るるれ叶さ海も船をそて白なるの物語ら

沖三　陸ハ其人白法ハ杉形と　家　載るハものまるての折

るるふや

一ちまう　雄　ふ少てきあるさうか　巴　陵

あるよう出まる白　伊　力　月　鄭　兼

蘭てうかるるるかるるらむ　夢　を

詔　其所の古原　長安一尼月萬戸　擣衣声

沖三　陸ハ其人の一類白法を山也　踏らと踏出しるるくのる

あるるるふハちもこそ

赤のるるしや鄭を紅人のものを妻し　山　史

西のあ美まるの松明りの　家　仙　衣

[illegible]

紹 其人の方法　うるはしき板にうちたゝみ行いとうるる人
やとうあるる相伴を紅葉と名たゝるふ風ふ紅葉てのもの
をうるる色

沖三 世界の一物句法古山　沖奥の夏をうちハ雪をうけて出つ
らんと前句を動のて降ら

行年の矣こ後もをし少　馬　面　羊
毋を後　世ちり　塚ちうを　白　鹿
旦伽るる相家伝　つまる　蓑　を
紹 其物の答分　矣こうるとつるうる塚を何らひ言る所古山

[illegible]

沖三 其人の一物句法ハ古山也　めさまて行ハ蓑こ人
[illegible]

八幡宮地るのたゝしめの山重第　波　光
月　常　うちの　宿の家く　北　市
弱年の故たるうふたのつりて　蓑　を

紹 仍ハ其物の方法也　山重第ふもの酬あるく板をのつら
古松の海さる沢ふ中

沖三 其人の一物句法ハ古山也　弱年の云りたるハ如る
泊のとひしさ海蓑の故も[illegible]

林屋ふる梢の夫も見えて照射の月 雪宏

木ゝも茅ふかし下雪 秋比 雪成

碑の苔ゆもうはるる夢捨ゝ 夢古

紹 所ハ世尊之峯と梵語ふ木菩提樹ハ何ものかふ

しなんら比多の口伝もけふ

才三 其人の一枝ふて白法ハ移形 壺の碑文と尋ね入る

風流の羈客ふる

（翠の字をとり えの仮字字）

西施ら義 水北ら素琴

蕙ゝら移る蓮の夕風 杉雨

什門ら（て如ふ夢ゆ夢なし 夢古

紹 所ハ風景時分の折法 愛句ハ彼見しき如のそゝと

蓮ゝと西施ら有ゝまりて神浸しさゆゝ見て蓮の蕙と紹て

客ゝと補しゝ雪氏ハ月照新彩水底明月熟香袖空中挙

才三 所ハ其物ふて白法ハ古山也 何葉別者の庭数奇ふかゝる

賛ゝ

白蓮ふ堂宇有ゝ 仙客ふ 槿 馬

稲の行儀も踏め 碧霞 志 席

拾しゝ見たゝる ふ句ハ みきゝて信ら言の有様ふ小間列

紹 所ハ ものめし

ゝら猫見ゝ ゝて ゝふ 見て 夢古

ゝら猫見ゝ ゝて ゝふ ん見汚せ ゝを ゝ ゝ ゝ ゝ

第三　陸は何分世節句法は古山心　月のおとふ声うるく紀紀
年し川辺の風景をうるを　　杜涼
翅板のうへも多よふ西蕪の夢　　丸し　南五
こゆせはゆふ水ゆ　　たちちの声まつ鼓の窓の戸ふ　夢　を
　　厨の水つるひいを活し切らう蓼　風ふ
　　こゆも高しゆる眼前
第三　陸は其場の一鞠ふて句法は古山心　　稲を西関の井水とんゆ
　　て一書鼓の鞠ふもの　　伊豆の山ふ　　て熟面の月雪ゆ　　壽　寛
　　島こも陽て

細うう　さくり　鱸庵丁　尺　樹
　　稲息ゆ　萩大名の花候て　夢　を
　　稲　其場乃井清心　　其場泉コハ初島を大地を清き月ふ
　　ハ　出きるる　し　魚鱗ふと　所ふ　ハ　俗衣の神や
　　ぬるさん
第三　其人の一鞠ふて句法は古山也　　の稲ひの　　の　　ハ
　　ふ幣て　の七文字　　ハ　　曲節ぬむ　　ふ
　　杉　　て　　稲　　の　　浮　壽
　　狼　　第　の　月　　花　口
　　霧　　の木地の　　て　夢　を

紹　四節のとのあなと　嶮き山の麓ひ小笠原ふ萱枯果て
松ふこゝろ高き高の月代ふ高の凄きもさそ
弗三　其人の一類ふして匂法ハ枝形と　温泉の名あるこゝろもて
ゐして

紹　昌　事ふ栖ち花ろ　祇　三
酒ヲ原側の人もつを月　故　一
夫の秋のうを寄ふ云きの　翠　を

紹　四節の手原也　翠匂ハ栖をもて上臍の風情を述て風の辭と
さ水ハ宝秀の才ある宮つ人も指をおふあるこゝ
弗三　所ハ四分四節の一類と　匂法ハ枝形と　紹ハこの秋の色さまも

尺ヲ下てさゝハ待こし夫の腰ハうル水しとふも知らふて
下京へとこゝあ日ゆう　小四　白　美　知
四百しらこの連の連牛　恩　守
春の白のかくて牛めし　蛍て　夢　を

紹　夢宮の手原ふて八津口鶴るなをふ連結合る恩
本女の姿もこゝらし

弗三　其人の一類ふて匂法ハ枝形と　安さしきさ白とこゝふこゝて
髮情ふ人ふこゝをちる柳　文　母
四を飯る草北戸の月　情　車
汝ゆう角力なとハと後接て　夢　を

伯　其伯の弁論　髪ゆひ人ふんきやと云ふ世を思
ひ捨てゝ西方もとひてうしらんをあてとゝ詠る富士の雪心
者をの伸ふも通ひはいんゝ

沖三　其人みて句法ハ左山　かゝる苔の戸ハ苔もの花も訪ひま
まさん角の景色ハ流石ゆ大劇の芸術る一てつをゝ
格して趙の名成る美りゝ鏡　平
嘉子富ゝ　田舎　神社　宮　事
主脳の(を)尊の柳をこのきらて　美　を
伯　風景の五感　西路の名成ハ風絶自ゝ　海を水ハそこを
ゝゝて西路とひ静なるゝ好ふ對て農業ハ俗をを思ひやる風

雅の一絶

沖三　其人(其場)言ゝと仍りなるハ何基礎の別業ゆて如つき
調度ゆ一し

耳ゆ数珠ゆ事て仏をう　翠　系　湖　堂
石ゆ火うつを　秋風の　ゆ子　巾
宣杖ゆ月見ん　ゆ　磐の底ゆて　美　を
伯　其人の名ゆ分ゝ　耳ゆ数珠ゆけゝるハ(ふ)用ゆとんゝる(ゆ)
魂系の心をひさもゆん電光石火の観表限ゆ
沖三　其伯ゆて句法ハ左山　風の前の塵ゆ杖ハ横人とんゝる其伯の一絶ゝ
山さん　海　ぬ　磐の　変り　ゝ　左　幸

みちを芦も重の八重垣　黙　我

名乗ふ雷医　うゐら面刺えて　夢　を

紹　風景の抜句　八重垣つくれを八重垣をとあり　神詠を

枝折てよく歌の文字をもとり二句の姿句中ふ重者といふ横をん

沖三　所を人〻句法ハた山〻芦を八重垣も歌ふさる殿作の想像

なをそ見て書醐とハのしらひあるを

雲の峯くゝけて多う　迎れ　杉　吐　船

麻もまる因もたるの　雲　夢　也

器ゆん車〻と　遠て　来　て　夢　を

紹　天拓のとゝめなゝ　まる因麻物〻陳さる頃のなれなるん　雲の峯

くゝけて白波の涼しさ紙学ふ

沖三　抱清の伊〻句法ハなをそらくゝと紀る一し何某女の世名ゆふ出け

ん車の風情服るし

てふ〻の羽まる世ゆう西北京呂　竹

咲る　茅　り　夕日　白　主て　桃　司

客　付て　塩　まる　翼　翼　を

紹　陳の羽まるをきくゝと別霧をとしられふ手大まるの蒲柳葵も

傾〻日の光とはゝるうをまる抜折学

沖三　其人の一鶯〻夕日のうつろひより客竹風情と抜折学う

実柘榴の浦の翼なるハ一塩まる　まう学抜ひよ

五月雨や宮の八幡の下ろふる　蘭堂

つゝぬふいそふ里の早苗振　境山

小廉風ふく粕屋の宮を尼そうて　蕉右

紹　相諸の寺院　下野の宮の八幡の夕鶴　芭蕉

やくそうの法をきゝ奥之の代の刹とかやされハ今ふ鶴とハ是なるべし

才三　其所の一物因うへのいそうき中かり屋の心をぬるなるべし

炭賣り童の起ハ荒ふるう　魚紋

所の名産の寒きゝ　才蕉　金鬼

蜀魏の四解もあうえて来て　蕉右

紹　沼法寺初るハ炭賣の外ハあらじ　ふ市中の師走も四ちえ鳥の

後の言葉新を尋ね所之

才三　其人の一物句法ハ右山之の胸ふるとゝびけんそ川井

敬く寒蜀の解ハ初ふつゝきし所也

志ゝ奥の吟見て水のこうろ　元子

少ゝ丹もかゝ原杉の夕茶眠　江

うえ世人を其の賈の来て来て　蕉右

紹　志ゝ奥の水くるさゝハ江湾を途自とゝ仲の名之ふ

いそひ来えるなるこ　蕉を記せる俗あうの其の高色面白き寺院

才三　四節の一物句法ハ右山之入仲の風情ふして解ふ

12

紫陽花や花に住るゝと水北る　都厂
藪陰もるゝ入梅の夕晴　風牛
こゝろして連歌の庭に結まけて　蕪　古

評 紫陽花に水掛るもあらんとハ花の形容なれハ外も柳も
まさすあへぬ景物の俤照ともなる手際之
第三 前句を古寒なとの隠家尋るひとる敷人の一轉ニて句法
ハ格形之

外出て障子の隈や後れ月　馬老
燗酒り柿に子の比乃杖一　菜
出し米河ら面白の帆を揚て　蕪　古

評 木の葉にはあらずして只竹のこかるゝぬ景色のそよ／＼と障子
に移りて何某亭主の筆意を添らしきもいつ酒なとのめてゐ之
第三 其人の一轉句法ハ左山之豊国の当座ニハかゝる心も井を
走るゆあるへし

洛中へ陸行ほどに十町ほど　斉峰
神名月とありて濡髪の月　耳得
吸ものゝ手をきりて客を留め兼て　蕪　古

評 神名月の物凄き柿から諸行無常と云ひき後れハ悩
の威も尽して...化身も物へ行と神佗座の老人の趣味を
なかりの傘も身添ふるへし

沖三　其人の一期法は枝形と　華後のさくらも枝永の比なれば
先百のまれつゝえん　華より露　石
蛙は雪解をうらやむみゝは　東　破
川　載の言葉をたゝうひ　ひとりゝ　夢　古
紹　叶ふの赤虫と　叶百も華をうんと戸形と押えまきしらは音
蕉句の起つけ　やさしかうとは　一ちうとひゝふかるの風
陸もこゝよいん
沖三　句法は古山と　魚四合谷の夏の松は弾ふ時ふたうら
んとを後の一期なれ
七種の粥や　松の除のうち　支　庵

紹　はゝ一男　男の妻の　乾　芭　萱　小
百千ものこゝふ人も　帰りて　夢　古
紹　其人の赤虫　鈴のるは宮祓の人の信あるうん　松の字を
を国小鍋力年男のうの時うる　梁も　あるけうしうる
沖三　句法は枝形　陽は叶蕉　百千ものの　夏　芭　下　馬
春の夜ふ　ふるまきて　夏　小　丁　馬
山里ふるまきて　尾もの家の　棟　唯　我
猪　的は　酒屋の通ひ　ふつゝんて　夏　古
紹　家侍の　叶　合　谷　ふうの　家　小　多　叶　あるの　者
ひとゝし　今　彼は　庭　なと　ふる　根　生　人の　ふるふ　花　年　を　立し

第三　古山之陣ハ其人ガ新代の極ひまも武士を忘ざるハ実
山里の古風をうつし

梅の香を尋ぬ押分て宮ゐ行ふ立　涼
足袋脚絆ハ旅の体　透　翁
物ゝ見ん鶯ふる寒ふ行過て　夢　古
紹　神ゝ祭る梅ゝ寺ゝ古里ゝの路ゝ孫ゝ自ゝ立ゝ出ゝ化ハ足袋
汚ゝ古ゝ方ゝ年ゝ月ゝ風ゝ情ゝ其人の手ゝ法ゝ

第三　白法ハ杉形陣ハ其人也中のうゝ此義ハ足袋ハ豆板ハ
しゝる蝋燭ゝ行過ゝ古ゝ

夫の形を買つくゝたる牛丹ゝ　蝶　羅

山紹ゝ千　裏ゝ山ゝ紹ゝ息　亀　章
狩衣　法　ゝ立ゝ　馬下りて　夢　古
紹一刎千金の形も買ゝ立ゝ　ゝてゝのゝ沖月ゝ立ゝ立ゝ立ゝ立ゝ姿
ゝゝゝて山ゝ小紹ゝ立ゝ　ゝ月ゝ立ゝ其人の手ゝ法ゝ
第三　冨士の法狩の比ゝ立ゝ　ゝ立ゝ白法ハ古山陣ハ其人
涼しさや波の玉ちる三井の鐘　麦　由
秋やゝく手き法田の夕照　夢　麿
ゝゝ士も京　ゝ　ゝ　夢　古
紹山古の夫の父ゝ立ゝて　ゝ立ゝ
好風ゝ立ゝ　ゝ俳ゝ田の俳ゝ　ゝ立ゝて　ゝ陣ゝ立ゝ

才三　其人の句法は高山之年こゝの上り下りは一路書るの書
ふうりゅうや

櫻咲川中施行の丸本　橋風　升
京うらいく　笠子英のり　西　羊
出雲のまき巡辞せぬ　花をうつく　蕉　古

紹　山路の春陰　故きき山川の花の新いうつしをうら行のふく
の花ふやのふさる仙　の橋　蕉　橋の春陰とハ弾偈の春陰ふこと京色
のうもきらす　春あき陰ふ比ふを

才三　其人ハ句法は高山之　象の通ふ名ハ耳ハ水ハ今
年の初のうを也

六除屋の陰きふ　旧　國
花も春山の陰ふ　メ　兵北月　石　髮
なきふふ　紹　蟬　蕉　ふ　蕉　古

紹　蟬鳴ハ　塔ふの陰　陰きのふせく　六蕉四字の新
陰て岩ハ　岩のとふ　花のとう　仏除月　義ふとなし
ふ花のふ　古

才三　陰ハ其人句法は高山之　新の名句の句ふと田舎ふふ人
の句ふふる　蕉ふ　ハ棒柔術　橋も四ふふ
月ふ引ふも　ふて　踊ふ　習　秋
稲の穂　蕉　力　橋ふ里く　蕉　舟

霧うち心の弱の旅寝して夢を
拾とうの年　月ちとハ雲花の至論ふ行ふハ初月ひとさて
ぬきあり〳〵さを多ふ春花は積雪の孫ふ里〳〵
第三　路ハ其人白居ハ古山　去百や夜々を秋見て世の中よ
り是一番こしちせんとなるひて
豊ふ水る松とそて行や橋北ふ　格　泉
水て白ふ　ふ　北　川　き　居
家厳盤杯きの裏ふ残陸て　夢　を
拾　松たの花入まる松ふ松て死ぬにしきもこ二とを〳〵ことくなき
こゝろをこゝろハ義橋水の水行てゆる風陸碁指の手原

第三　其人白居ハ古山　さゝたまの陸あきてもかゝる義を
碁杯の橋し
陸を松とくとくらん冬の月　眠　我
市の豊の水の橋て　知〳〵裏　白　翅
塵　城て聖の松丸かよハきく　夢　を

うつり香の根深も夜の契りかな　天府

妹が身も寒き鴛鴦の鏡かな　蕪古

さむしと細江も年の浪よせて　婆心

評　其猶の折添

第三　此発句之轉句法ハ古人之　初もみの道妹がり行けハ冬の夜の

河風寒く千鳥鳴くと上下の句に季風情をつくしこれハ季中ゟ

轉じて出て実に第三の本意と云へし

出る月に更けて動くや細代る　婆心

焚さしくまる雪の燈舟　蕪古

擬らふ誰めぐらに鏡るらん　柳門

評　胡白山のきらくと細代の業も立て原さる漕行く舟に水を

と云鼓音の哀しさの折添

第三　發句綜に立て綱とされハ鐘の中にかゝる物ありと目の付し

一轉よ致し句法ハ古山

躍とハ女房もならぬ白髪かな　桃鏡

月の隠舟の棹深　三鼓　蕪古

桐落る内井の雲くらく　支路

評　其人の折添内にハ別義の親仁もかゝる家ハ都の初秋ならん

女房のかくし酒抑深の一興

第三　其猶の一轉句法ハ古山之物観のつれくと立信を秋涼許ゟ

雪ちるらん

去来え啼るゝ庭く去室ニ不　新　鈎

うら干る衣も　紅　葉　秋　萸　古

枝豆ハ月の芋ハと　喬　麦　穂　茂

評　萬葉の律も奇かくてまて去室の淋しさ去構の外ハあらし

停若気人ニ干歳をしも折る此精ニ符ニ帝ニし此慕の手篆

第三　其人の一轉句法ハ去山此家のむつかしくれハ月の字ハ何らぬ

乎て去人の一旅を任ら不ん気協に應し出し

秋さくや　霧又際て　月七日　魚　紋

人こうしこ　冥ふ山　彦　義　古

閑の家の飯　横さ向に赴らけて　梅　勧

評　手篆　横の木の日ニ陳る月ニハ論らんるを高る碎家の寄

笑ひも祇園清水の茶の利生の言

第三　其場の一轉句法ハ去山ある隠士ハ此一家を碎ニかけて出し

きけハ様に出しとみて

夕也や　森に生る　蝶も　花の数　古　喬

門待　飯喰に　夜の棲　送　萸　古

見遠るえ　服ふりの　笠　取て　西　羊

評　其場の手篆まハてる妻ゝ二布なつる脇腰取まハし

夕暮の日かけなるまゝ寂し

第三　都の富家小倉を築き昌子の男成人せしめんとて
小倉長谷寺に詣る其人の一類自害の形

八重一重菜の都と成ふり枝　菜
家酒の泉　市ヶ谷の水にて養生
先ふ酒好きふ月和のうらう多八十男

狂言所作　柳樽をこきすせしと云て一重の比と成て家に
秘花も一あ光の都まて　帰来浮川葉妻女今日登高醉歌人

第三　此分の一類仙のとふく分見心して空撓ともいえん味ひ多し

去ことや海の果白北限まで　西　羊
都ふのことと物まふ川　松　蕨　を

沓冠の嘶ふ多ふ多ふん東丸り　文　毋
狂言のあ分海の果北限と第国を訪しふれハ　ふと云を唐
士とも行方を知ふのことと知もふふふと有しを思ひよきて
第三　其国の一類自害ハ吉山世沓冠の玉笛を吹ふ多ふに
ふふふふふふ

玉の緒ハ細れ笛と　春ハ　昌　物
引板の春の春の春迅速　蕨　五
二ふ里の高ふ月ふふて　五　月

狂言所作ふふふふふふ秋の春ふふ物ふくふ壹声　結ふ物ふ
第三　其人の一類自害ハ吉山　兼成の弱ふふふふふふ弱の声ふ

加茂氏の隠山家八秋の秋の月

動くとなくそも夜半の寝ぬ野 蓬戸
松の下井のところてん 居蕉を

徒然草 ものもまの西日 日暮れ 西孝

第三 其人の一物を内にいとこそ 為家もおもえていと西の白法杉形
脱ぬえて夏衣 袖うち 松醉
隠世時 月 知 日 蕉を
玉簾より 簾象かさ きこき 山史

紹 所は世俗の向時をうしなる英人の姿をうんされ 隠の宮

家を恨る 去 去 馬屑の心を 去 去
第三 遠分の一物白法吉山前の上下に姿情を 寂 寂 い 家 ハ
呂 家 世 去 信 も 名 の 間 の 風 情 な る 蕉

四 高 ケ て 自 の 千 る る 破 頭
永 う ふ 高 の 弧 色 の 去 さ 蕉 を
山 墨 の 仙 人 今 も 指 ふ 岩 ず て 極 風

紹 生 俗 の 去 俗 細 引 の 去 ふ を 千 る に 沈 ふ ふ る 上 紹 下
弱 の 簡 ふ ひ 人 色 も 孝 も 枯 ま ま ふ
第三 其人の一物白法杉形 猩師 の 風 流 も 目 世 孝 以 代 の 者
ま ま ま て

咲もちる花には風も面白し　山紫

露汲月影よりも瓢箪　蕪其　左

なる頃に夜の鶯唄ふて帰　景

評　よしやさけ散も色香の不変ぬ花には風をかまはぬ人さんとは
元和の頃の御婦人や神秘句の作者露路ぞ行てかゝる風雅心に
似合ひたるハいの有る冥加にや評ハ此等の方法

第三　其人の一轉句法ハ右山　厳別當の風情にて頭に瓢箪
とハ句作の寂し

川風に扇も忘れや放生会　可穂

月見之の為る躍の傑ち　莫　左

おひらきに千葉の紅葉ふつ落て　更仙

評　此等の方法扇も翻して涼き放生川の夕景傑ハ遊女
の翠寂さを揃ふれ

第三　其人の一轉句法ハ右山花を瑠者とも見立て神事まねを暖
思ひ見る座し

窓もしく見ぬ浮世に鳴るの雪　萬

人手に余る新田の秋　莫　左

とし綺之も隠らぬ月の北山の端り　西羊

評　とかく宿に鳴るの堀川も見えてちなみに彼岳賓候哉
もいまだね新田の小家がちなるにしみも意外

評三　此句の一轉句法高山光悟のこゝろは夜住吉に月の明りの押まるを
未だ深し

荻花も露へつゝきてさくのりゝ　可貞
清き月やぬるむ池の汀に波　慕左
手にとりてに青精飯を突出して　巴水

評　其趣新陳世及に清之ひてとは清幽のたゞ中そこに夜橋寺及じ
て鐘に幽か小気も其に酔るならん
評三　其人の一轉句法高山に幽なるに樋を蒿らの菜飯は寺兩け
し高亭坊なるべし

鳥ゐにつれ淀ろ似ぬ小味　頭　素男

其う許人今の有明の月　慕左
下る裏様は明月の秋なりて　巴陵

評　尽きとめのは静ふあらで紫苑に侶すかてそこら結縁なと云る風
流の主なるべし其生は鳥魚の菜の古るうも松ふひ出て明る新縁
評三　其人の一轉句法は高山付日の宮は何菜の老人ならし

其の好のそふ見ゆるべし　後此月　芳賀
延喜の式を代この秋風　慕左
さるゝく柿檜に老を老へよすれて　波光

評　月に色の心ていふし一を云て与るは閑寂にて晩秋の形容いひ
得たる發句なりんすれは延喜の文字は付す理窟めきたれと数こ力

[illegible]

第二　其人の一節句法は老山也　什人は世間に古実を味ふ人やうに
[illegible]

舞ふや野宇の清うち暮し　鳥
野の面ふ清る　本めめ菓のめ　夢を
一泊遠ふも[illegible]　[illegible]

[illegible]
小[illegible]も目覚る斗ふ前[illegible]る

第三　其人の一節句法杉形　此[illegible]
[illegible]て[illegible]人も[illegible]陰ふ一段の[illegible]

[illegible]て白き団扇ふ　野菜
[illegible]　[illegible]の比　[illegible]を
[illegible]　[illegible]　[illegible]　琴
[illegible]斗と野山の[illegible]ふ
[illegible]月の[illegible]
第三　其人の一節句法杉形　[illegible]
[illegible]の[illegible]ふ[illegible]
[illegible]
[illegible]　仙　衣
[illegible]　長　[illegible]　[illegible]を
[illegible]の[illegible]　[illegible]　馬

紹　其坊の手水鉢白風も此角ふ筋をさすがにさすがに
八流石女の白雪ふりかゝりさすがに牛河合人も打成るを心ゆるす様なりとえんや
第三　其人の一句白法寺山茶花の霜なるゆゑ寄りなき掃除の凡
情をとゞめる華厚ハ雪の何らひゆてさきる心も見所

かゞるゆふかこの花をぬ梅ゆゑ白ふゆる　西　番
仏のをるこゝろ若　葉　搜　ん　蕎　を
をしなの後のたもとを物もて　毒　寶ん

紹　所寺の手水梅の香のこゝ霞ぬをゆる清地の風情なをいふ
の雪ゆ梅ゆゑんとゆ成るしらゆ成なり
第三　其人の一句白法松形若葉梅と打解る大宮人の様なり

をゝ雪ハ減ゝ成るゆ成て物の一宮に雪をもをせり
入船のこゝをとやゝ雪の霞ものこゝ比　市
花の氣白のこゝ花咲　蕎　を
見ゝ仏の面表　成　樓ゆけて　梅　人
紹　時分の手水ゆこゝの霞といふる河ふをうて能渡の雪
の面をもゆ成ひやゝ霞ゝ其雪ゝ紹の代菜んと名妻なるみちの〳〵
山ふ小金ゆ

第三　其坊の一句白法松形こゝをもゆ比ハさもゆ成ぬ
公代の若を縮ん　濃をさき　花　席
金華　於る　ちくらをもり　蕎　を

嘗の華俗もうらを飾もなり　浮　壽

祝　其人の手法学問と柳を愛するに俳諧の一路さすがハ
その是非論なる知れども物なれ主とあるを古代の風雅にまて
及ばらまてるハ論なり

弟三　其俗の一句白法ハ高し　茶の湯を始ものとなりて故をつき
の華なれ　花の雪のそらく面ふ茅屋黄昏ときる林　き板

えつ年やとちくぬけても忘れ柳　善　成
百社ぬこつく　去此日ハ　義　左
うみうら雲雀の笑ふ音よみて　杜　涼

祝　時節のとあ　屋敷くの物柳とせ紙箱のうを一ら花しも

けしきうん西も東も面白き氣色ふ桜ひ柳うちの百社を異ひ
よりうおのみ

弟三　其人の一句白法高ち　野外の石達ふは腰折ふ
月七一鳥

麦の秋月を笑ひて入ふ詩客　松　白
風を法懸のとく　蛍　山　義　左
旅こうろの情ふ　ちくさあて　鯉　寸

祝　其俗手法ふ又年の見こそ吹つる水之つ一の白こちら
つまるし意飾も風流も法懸吹しつる山里の古風も面白ハ
物もひとうらのこ

第三　其人の一句句法格形詩の面白きを

[illegible]　南　岳

枝ぶりの出でたる椎の　秋　風　蕉　を

芋ぬき葉たしこふ出でる山畑の　乱　峰

紹　其陽の出原を去る岩井の出原も強更に出の主し役けなん

月の磯の[illegible]枝[illegible]多る心きひ成蕉

第三　景氣一句句法古山日[illegible]を[illegible]枝ある[illegible]ふ山畑の

姿ハ[illegible]

うちうちハ姫のかものそ　岳の梅　天　樹

紹　其人の遠ひ[illegible]多句ハ[illegible]る佳人の[illegible]や藪[illegible]ふ相[illegible]補

理[illegible]る[illegible]ま静ふ[illegible]さし[illegible]うちうさし[illegible]ハ年の

[illegible]の[illegible]の一体

第三　天[illegible]の一句句法ハ古山五尺千面の[illegible]を[illegible]の一句[illegible]

面白や月ハ[illegible]ひ[illegible]ひ[illegible]　花　に

五ツ四ツ夜ハ[illegible]　叶　に　蕉　を

金山の[illegible]ぬ[illegible]　秋[illegible]て　[illegible]　平

紹　柄子[illegible]

雪むく嫁もあり変るもあり

第三 取長き法を深くるハ合歓の倒にと雷を尋しる一勢の法枝形

多つけてほるとこの胡蝶こうの宮車

色むくさきみを照む蕚みや蕚を

芹そく市姫の厨蕚うちて左幸

紹 時分の去除去宗なる野外の風姿

第三 其坊の一勢古き物語の仏

夜神出や汀の白き蕚の杭子中

夜燈り解る宮出とく〳〵蕚を

上下り所人の尾の出とりて宮こう

紹 時分の去除 汀の杭ハ信者の風俗出とく〳〵ハたり〳〵みの取乃

ゑくさりくふ書きとう多の所を蕚

第三 其人の一勢白法出彼夜神出がとりふ若別ぬ上下の三五

もれり

裏出の竹ばとりて蕚の母 故 一

陀羅尼りふれるみ〳〵取蕚を

獨りて閉置の宮の宮の宮迹て 湖 雲

紹 時昔の去除貴白法あるかれぬものハ夜出の方より法ある

れもひなりりといふ家ものもかよひ法る保の石を蕚といふより蕚

石と思ひよりて彼り春をを出るを添り 仏を指り

沖三　生涯の一句句法形態変節を明瞭に示すものといふべし
浪速住吉の頃を詠ずるもの

山うつや　おくふかきのみは　柘榴花　黙　我
小春ふ　狐ふ　帰る　ちりく　蕪　を
西鶴の代官始の句織為て　玄　栄

紹　其角の句法千種百変も富士尾花えうの海を踏て清地の
動静に少倉鎌倉の山を見るもの原一

沖三　其人の一句句法を山牧士の撰るつゝひし毛百九大和歌ふ
して知り

冬石も　泣く　氣毎や　文　え　西　年

蝶　程い　ちも　牧　一　う　形　蕪　を
蝶の　ちう　を　色の　家い　嬰　る　の　ち　ち　みて　ゆ　ん　い　其　の
の風情のみ

沖三　天恵の一句句法を山知月の意の一天山西を　ち　に　て　玄　徒
調し　多　山　歌　計　中　ち　る

船　け　や　蕪　い　女　蝶　と　化　て　西　く　慎　車
男　ち　る　る　の　こ　を　ち　と　ち　し　好　蕪　を
四　う　ら　い　郭　の　水　の　ち　れ　ち　て　美　和

紹　其角句法　花を引るの春友達小法士の男位五を　ん　去　い

[illegible]あるうハ池塩利も[illegible]

弟三　其伝の一節句法古山老師[illegible]水の自由い[illegible]の一絶なるし

酒買ふ[illegible]る和ハ[illegible]し　禅仲[illegible]寺

[illegible]　川[illegible]　[illegible]　[illegible]

舞[illegible]の時の[illegible]の書や[illegible]くらす　明象

紹　其伝の[illegible]ハいつ[illegible]と思ひ[illegible]又[illegible]の門休

弟三　天[illegible]の一節句法古山　[illegible]ふ書い市中[illegible]

[illegible]ふ[illegible]の[illegible]の[illegible]　桃子

[illegible]　三千の[illegible]子　[illegible]

[illegible]の[illegible]　[illegible]　劇室

紹　其伝の[illegible]　[illegible]の[illegible]も[illegible]く[illegible]の地[illegible]ハ

[illegible]の[illegible]の千[illegible]も[illegible]の[illegible]

弟三　其人の一節句法古山世日の[illegible]ハ今も[illegible]南ふ[illegible]の人[illegible]少

[illegible]

二三人[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　巴

[illegible]の[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

住[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

紹　時の[illegible]　[illegible]月ハ[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]の一[illegible]の[illegible]

弟三　其人の一節句法古山　[illegible]ふ[illegible]ハ書[illegible]の[illegible]き[illegible]人[illegible]住

氣取氣ふ來るのはつまりは甚くらなる手柄

青柳やこれハ柳橋もなし　風牛

牛ふのりて来る吉の山ハ越暮　古

ちらり尾の雛子ハ鳴きも見ぬ日ふ　奥汲

評 其人も傍の手法を取といへる一句の風情牛に倚し人の額をうつしかも嫩柳の風きふ鳥もしらるゝと姿を見せたり

第三 此句の一轉句法古山牛ふのりて来るといふハ其の如膝のさかみさらん

傍て目永き比となりけらひ見たり

傾城もわまりて此牛ふのりけり　眠江

新酒ふ淡き夢の甘吹暮　古

ちらちらふ葉も柳も桐の舞ふ　雲石

評 時分の手法此句の下ふ夢をとらへは新酒の醉醒ならんと此句を合せけり

第三 夢の正路といへる詞をとらへて柳も桐もちらちらなる光陰を思ひ此句の一轉句法ハ古山也

浅芽生や夕日ぬれて雛子の声　耳得

紀先食む小雀の一ッ家　暮古

柳もぬ膝のこころの糸畑ふ寸　瓦子

評 此ふ愛芽生ふ狂ひて雛子の声ふ風情ハ正此句の妙のさ有るも人目思ハぬふ撒しも傍の手法

弟三　其人の一類句法古山かるふ林一き野哉も寺遠こゝろ勢
旅の藤宮の心安さよ

ほのぼのや衣桁ふ宮の こゝろ　夏　麿
凡　冷ふるゝと　枕　三ツ　四ツ　夏　左
押ッ付と　砂流の先　宮　遠　迄　て　都　原

紹　其人の手原　今年八畢ニ少例　勝先輩と五十ヵ人余の俳客
花羽織　流ちして　凡　冷ふるゝといさ一勝と　納ふの　友　笑　もたらし

弟三　其人の一類句法古山　砂京の　海　むら　を　葉　者ふ　砂　交ヵ　人と　寄
とゝ　平　て　今　や　ほゝと　心　つ　ひ　さ　る　宿　て　王　の　風　情

西　の　句　や　行　燈　に　ほ　ら　俳　て　行　鐘　山

杉　原ふ　こ　き　い　軍　の　ち　ら　雛　夏　左
形　き　ぬ　の　衣　紋　ふ　積　ま　れ　ら　き　て　馬　老

紹　其　砂　の　ち　の　ち　行　燈　一　百　降　て　り　と　目　ふ　て　ら　ふ　ふ　ち　く　砂
ち　ち　ら　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

弟三　其人の一類句法古山　白川の　宮　越　ら　日　は　恋　問　を　き　ち　ち　ち
ち　る　左　一　の　俳　し

秋　は　宮　ち　こ　ふ　句　ら　ち　き　苦　宮　命　鳥
月　は　ち　ち　こ　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
け　こ　ち　の　左　句　の　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

紹　凡　京　の　手　原　凡　ち　き　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

廿三　世話の一類句法を山家風そこなはざるは古風の意ふ
俗ならん上戸猪口や

藪入や蕎麦一茶　他一茶
なにこそんの赤もしうろいを蕎を
川の水一杯そこの白めうが　馬

探　其人の遠ひ分あるふ志賀の里も藪入の京程腰ふ苦学ら
の神の香も忍ばるよ弾丸黒子の物ゐ世ういんの野詞も耳列
思い意法となるん

廿三　世話の一類句法を山家風なるべく都の想式詞也
なるて初夫の新らひなる

五中や人も通らぬ秋の風　東　彼
月の上やあく山ら面の雲蕎を
今ゑ米一万俵ゐ枕ーて支扇

探　野ハ里の香さ〈酢ら〉ゐ人を見ゐ月の点一りきらぬく
も高ふすさまじき天ゐの赤原〉

廿三　世話の一類句法を山　二百十ら里ら〉の村面ふ山陵の工夫も
秋の一字ふ解ら

若の古刹ゐ佛さもよし雨の夢　蛍　尔
ゐるを夢ゐ月の松重蕎を
俗音さ右撲の羽織引ら〉て　る　文

紹　其人の手法にかたくなの感ぜられ一種一者の
神を感ずる流派の宗家を補ふべき
第三　其人の一幅白居易山　古帝冠を冠り大山八角なる
仙人〳〵

三月の山流を描きうる者唯一
夏山の奇峰を奥と
夏かしこ陣幕つまむ仙人として風井
紹　其人の手法三日月の象も一片の雲と雨の降る彼
雨霧の金泉も沼を蒙蒙し
第三　其人の一幅白居易山　金山の陰なる小楼三法古正の御
もちゐる

一瀑ふる蒙もかくるかの萬壑
咲るさくら黄のまゝ男夢を
墓所は花園廊を樹立て梧泉
紹　其人の手法沼の高嶺の水流なりて沼も見るを如き
雨もやゝ二日三日陣を出でを
第三　其人の一幅白居易杉形岩地　岩船の四使とも
もて出あつめ寄せ合のきまるゝ

今ことゝいふ中山や初しとき遠　爺
口切つゝく杉の名戸出　夢　古
悠然と人寄る　跨りて　陣　琴

紹　世古の手除　黄白梅花の風情と云ふべきもの
の姿なれば十徳の表戸也と外ならう
沖三　其人の一類白法左山　紹鷗の戸の表うら四角うち開きて
唐紙張りなるべし　梅の香や　女の神のたちいづる　竜章
　　百姫たり　迦(ジテ)　神の来殿　蕉　也
　　蕉翁の句大名風の振舞きて　蕉　也
紹　其人の手除　梅の香の粉ひらひらふさ四方　花の八重世の手除
沖三　其人の一類白法左山　前句を受て神きさなるまこの雅女
法左山　ちとせ　ちとせ

　　雲鶴や　水の船　紹鷗の九月　茅山風
　　いさ一ちとせ　蕉の　月　配　蕉　也
　　二月三月　うつさぬ月　繰くさ水　菓　堂
紹　其人の手除　能鷗の九月　水桶に成水元月の左宣中う
　　蕉の鄭文　夜小蕉　なるの川　梅　けこちん
沖三　其人の一類白法左山　紹宗　紹法のきこうはまるる　紹宗
　　春友達　いさもなりて　鮎の子　鮎　もみくうぬ言紹う
　　月　紹　神　の世　宗　念仏　蕉　舟
　　ちとせ迷ひぬ　一　の　色　蕉　也
　　暗笠のいろ　ちとせ　茅山　風

紹 其人の居所白鄉も祝平の甲斐なく安化地名なりの金仏
有名なれば吉野の奥にかくれて仙ふ乳の一名なるべし
第三 其国の一類句法形形大芝生きこと鬢のことなる法師
なるべし

菓の花の雪こそ降るや 青陽
猫もかしこ ふる年のそこ 夢古
提汁 いそこ 猫なり 宮とて 宮 秋

紹 意外愛句意の一字にて古歌と為して小説くしのそこき
古を尋ねて一歌を古るの形異なるべし白毛の二字はこふ
其金時を去るべし

第三 其人の一類句法形形 有名なるの山さそこを詠めて
法師の意餉も日中の乐を形容せし

ちるを人生に喜ぶ柳の春 石鼎
歌僧多るり 宮の明るの 夢古
水無瀬をいう連木小実麝て 旧心

紹 其国の名所なる人なて天地を動とある古今集の序
人を指られば歌の一字を名付ける付集小
異なれば歌を為て力を合せられば歌を軸として神を宥ふ歌也
平百余年の紹第三雅恩小言ひちらして 融の
第三 其人の一類句法古山 稚拙の人とるべし

追加

[illegible] 信 [illegible]
[illegible] 白 牛
[illegible] 岩 亭
[illegible] 山 人
[illegible] 汀
[illegible] 蕙 且
[illegible] 野 牛
[illegible] 求 光
制 [illegible] 浦 舟

[illegible] 腦 自 陸 山
[illegible] 吐 月
[illegible] 蕙 左
[illegible] 三 甫
[illegible] 人 左
[illegible] 六 岩
[illegible] 蕙 左
[illegible] 山 朝
[illegible] 雷 堂
[illegible] 阿 音

由若狭てつゝ[illegible]ふる雨の音聞く　古
限なきハ月も限らしと雲間　竹
哀更ふけ白妙なりまさんと　児

此一集ハ堂門法師の望ふかきをもて主師の一興なり
〜と云ときめて終ふ百の数ハ金玉ならんとて
そこらの人こゝひあ〜終ふ蓮ふ再案もあるべきにあまりあ
うん能聚〜と云の自門新心の一冊とあれハいとみるべし
求出を席ふ校ひて写きるふ安と思ふ安と御秋と
成て心中むと云はたるべきの言葉をもる歌とひとつきへ
ちこあらふて法〜筆をもるとハ深む